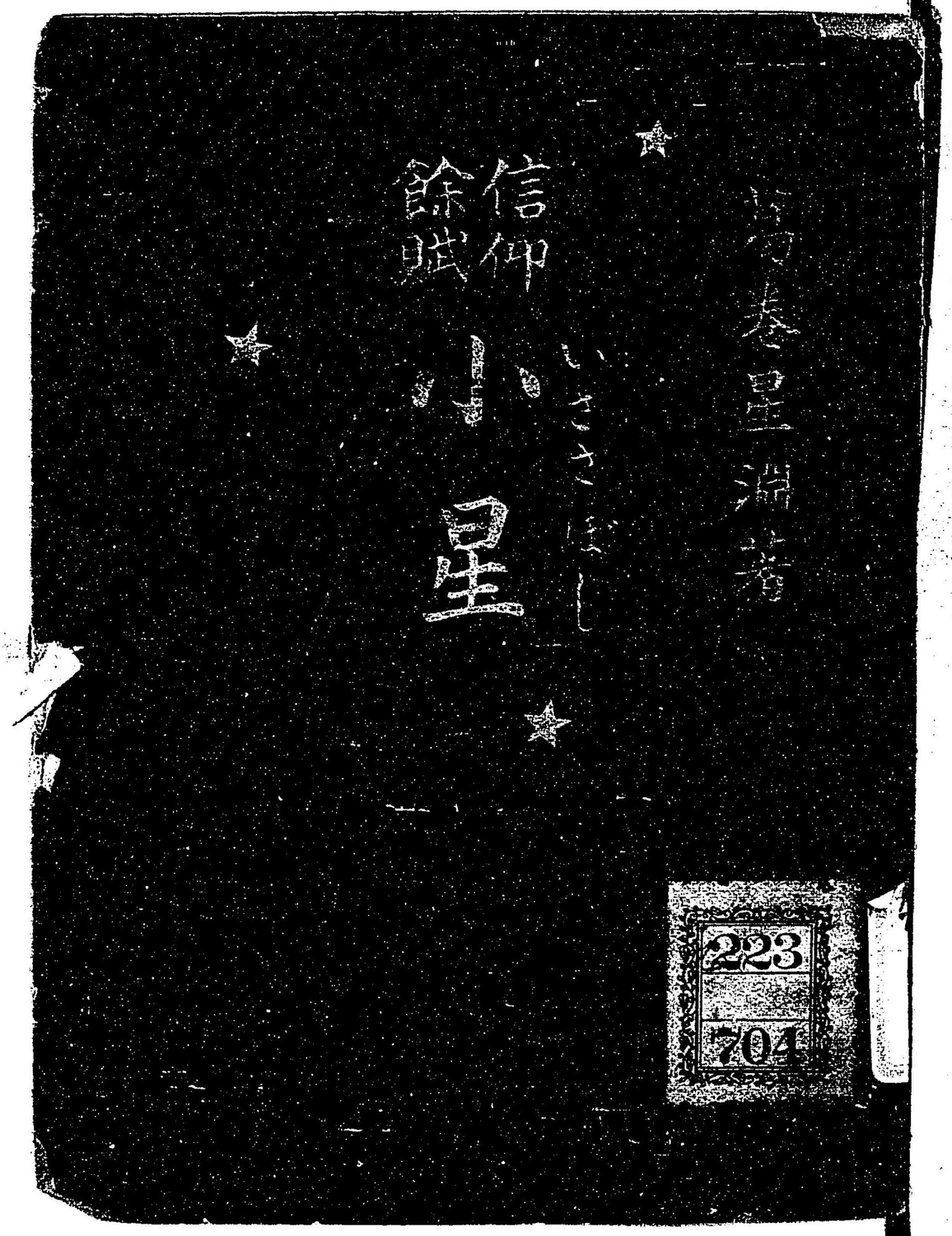

020241-000-7

特63-560

小星（信仰余賦）　附，詩とは何ぞや

葛巻　星淵／著

M38

ABI-0044

特63
560

版再正訂

星

餘信
賦仰
小

葛卷星淵著

中庸堂書店

謹んで此小冊を我等の
恩師内村鑑三先生に献ず

明治
38 5 8
内交

互に、詩と歌と靈に感じて作れる賦とを以て、語りあひ、又謳ひて、爾曹の心に、主を讃美すべし。

（以弗所書第五章、第十九節。）

再版の辭

淺薄拙劣の一小册、不幸にして日本國中之を讀む者なしとするも、唯我等の最愛する一人の恩師が其の一篇なりとも吟誦し給ふあらば、其れにて、著者も發行者も共に滿足なりと、心に思ひ定めて之を世に出しゝは昨年十二月なりしが、圖らずも初版既に盡きて、今や再版を見るに至りぬ。是れ我等が望外の幸榮にして深く感謝する所也。こゝに恩師の書翰を錄して此の再版に題す。是れ唯、其中に含める高貴なる敎訓を讀者諸君に分たんとの微志に外ならざる也。自贊の嫌ひあれど、全文を掲ぐ、幸に諒せよ。

明治三十八年二月

著者識

發行者

拜啓。陳は先般は中庸堂主人を以て貴著「小星」を御贈り被下、且卷首に於て之を小生に献せられ候段、小生に取り非常の歡喜且光榮に御座候、小生の微衷が斯る者となりて世に顯はれしを思ひ、主に於て爲せる勞働の全く無益ならぬを知り、大に志を強め候。

扨、早速拜讀致し候處、大體の御精神に至ては勿論徹頭徹尾御同感に御座候、殊に始めの二篇が最も善く貴兄の御氣質を表し居り候こと丶存候、卷中最も善きものは御短歌と存じ候、「登り來て仰げば高し神路山」は信仰歌として第一位に居るべきものと存候、其

他概ね短きものは長きものよりも善きやうに思はれ候。

且又御注意申上たきは、弱をのみ慰めんとせられずして、大に大を賛せられたきことに御座候、貧者を慰むるの術は、時には亦、大と偉とを思はしめて貧を忘れしむるにありと存候其點に於ては日本の詩人大體が誤り居り候こと丶存候、我等は時には路傍の「ひな菊」たるべし然れども、亦時にはヒマラヤ、ガンジスたるべしと存候、アムビションなくしては大詩想は出で申さず候、而して是れ亦神を信ずる者の懷くべ

き正當なる精神の一つと存候。

何れにしろ、成るべく丈多く英語力を養はれ、ホイットマン、ブライアント、ヲルヅヲルス等の詩作を御研究なさるべく候、日本的小詩人を以て御滿足なされぬやう呉れ〳〵も御注意申上候。

右申上度早々頓首

十二月二十九日　　内村鑑三

葛卷君

余は一基督信徒なり。嘗て茗溪に在りし時、日曜毎に、角筈の里なる内村先生の許にありて靈的の修養を爲すを得たり、これ凡そ一年間、短しとはいへ、余に取りては他の十年間にまさりて價ありき、そは此時、余の宗教的歴史に一新生面が開かれたれば也、余が信仰の今日あるは誠に先生の賜物なりとす。余は當時その感想の徂徠するまにまに、筆を執つて作りし者數十篇、その中或は先生に示ししあり、或は友人に送りしもありき、今其の舊槁を集めて此の細爾たる一小冊を作りぬ敢て之を詩と稱せむや、小信仰の小感

想のみ。されば、かの美文麗句といふもの、若くは巧想妙思といふものゝ如きは、余の斷じて傳へんと欲する所に非ず、亦固より傳へ能ふ所にも非ざる也。唯、此の人生の野邊に闇黒(くらき)と荒寥(さびしさ)とを感ずる世の兄弟姉妹に對して、一片の光明と慰籍とを供する小星(いさゝはし)たるを得ば幸也。

明治三十七年十二月　著者

泉……一
乙女按摩……七
航海の歌……一六
馬車の馬……一七
感吟(一)……二四
天ノ國……二五
人の心情 神の心情……二八
農夫……二九
睡香樹……四四
白百合……四五
感吟(二)……四八
獨唱……四九
鐵道工夫……五三
眞の光 眞の力……五六
朝顏……五七
蝴蝶……五九
菫……六二
平等……六四
二ッの水……六五
北斗星……七八

目次

蓮……八一
凱歌……八三
車夫……八七
花の死……九一
感吟(三)……九六
蜘……九七
人工天然……一〇二
蛍が妻……一〇三
求安……一一三
感吟(四)……一一八
葡萄……一一九
蘭……一二二
歸鳥……一二三
鬼薊……一二八
暮の明星……一三一
貧者の贈物……一三九
感吟(五)……一四二
河と柳……一四三
無名の花……一五一
處世の歌……一五七

泉

信仰賦

小星

泉

心の清き者は福なり、其人は神を見ることを得べければ也

(馬太傳第五章)

天地治らす我が神は、
奥山陰の岩が根に、

葛巻昊淵著

湧きて流るゝ泉とぞ、
我を祝ひて生みにける。

我に海洋の大あらず、
我に江河の雄あらず、
我に瀑布の烈あらず。
我は小さき泉なり、
我は清けき泉なり、
我は靜けき泉なり。
我は彼等を羨まず。

我は彼等に何愧ぢむ。

優しき花と、潔き露、
これ實に我れの姉妹にて、
温かき風、高き月、
これ實に我れの兄弟ぞ。

我を慕ひて、嬉しくも
我が傍に、集ひ來る、
小さき蟲鳥これこそは、

我が親しみの朋友なれや。
我れをたよりに、嬉しくも
我が傍に、生ひ茂げる
無名の草木これこそは、
我が愛しの知己なれや。

重き荷物を背に負ひて、
苦しき路を暑き日に、
汗にまみれて行きなやむ
氣息絶え〳〵の旅人は、

皆我が邊近く來て、
兩手に掬みて我を飲み、
「あゝ我がなやみ癒えぬ」とて、
感謝に滿ちて過ぎ去りぬ。

自然よ、人よ、汝はそれ、
我が行末の果見きや。
海洋の大、江河の雄、
瀑布の烈も、あゝ何ぞ、
我が流れには非ざるか。

天地こゝに靜寂りて、
萬象今や眠る時、
小さく、清く、靜かなる
我が水底に影落ちて、
分明かに映ゆる星一ツ。
こは至高き神の聖姿。

乙女按摩

南曹天に在る者を念ひ、地に在る物を念ふ
勿れ。

（哥羅四書第三章）

肉の事を念ふは死なり、靈の事を念ふは生
なり、安きなり。

（羅馬書第八章）

妾れは盲目の按摩なり。
幼き時に親失せて、

たよる兄弟姉妹一人なく、
身は孤兒の乙女にて、
あはれ貧しき按摩也。

玉なす汗の夏の日も、
氣息さへ氷る冬の夜も、
唯一本の杖に倚り、
唯一管の笛吹きて、
此の世の中を渡る也。

されば昔はしかすがに、
不幸の宿緣かこちつゝ
薄命の身を嘆きては、
天をも世をも恨みしを。

「愛なる神」を信じ來て、
「永遠の生命」を求め來て、
思へば嬉し、あゝ妾が身、
今は世界の祝福を
一人にて負ふ心地せり。

他人は物見る眼の故に、
形色美しき現世の
惡魔に、あたら、誘惑はれ、
罪惡の巷にさまよひて、
滅亡の淵に身を沈む。

妾れには眼なし、然れども、
みめぐみ深き我が神は、
心靈に眼をぞ與へける。

汚れに滿つる肉の世に、
地上の物は見えずとも、
永遠に聖けき靈界に、
天の光を認むべき
眞の眼有つ妾が身には、
誘惑ふ惡魔遠退きて、
羽ぐくむ天使ぞ伴へる。

吹く笛管に妙しくも、

神の御聲の聞ゆなり。
つく杖竹に妙しくも、
神の御力こもるなり。
妾れに躓く憂なく、
妾れに迷はん恐なし。

肉の快樂も何なりや、
地上の幸福も何かせむ。
靈の者のみ神聖くして、
天の者こそ永遠なれや。

空しく消ゆる塵の世に、
榮燿る花をも紅葉をも
拂ひて潔き妾が袂、
過ぐるも平和き春秋や。

妾が得る代は少きも、
肉の生命を支ふべし。
妾が信仰は薄けれど、
靈の糧には餘りあり。
思へば嬉し、あゝ嬉し。

感謝の涙胸に滿つ。

肉の手をもて、世の人の
肉の痛みを癒さんは、
これ妾が日々の職分なり。
然はあれども、なほ更に、
靈の手をもて、世の人の
靈の痛みを癒さむと、
風の吹く日も、雨の夜も、
笛吹き鳴らし、杖に倚り、

市街の隅隈廻ぐる也。

弟子彼れ(基督)に問ひて曰ひけるは、此人の罪に生れしは己れに由るか、又兩親に由るか、イエス答へけるは、此人の罪に非ず、亦其兩親の罪にも非ず、彼れに由りて神の作爲の顯はれん爲也。

(約翰傳第九章)

航海の歌

我等は「救ひ」の舟に乗り、
「潔め」の海に航ぎて出づ。
我等の揚ぐる帆は「信仰」、
帆をやる風は「聖靈」ぞ。
楫取る人は「基督」、
目指す港は「神の國」。

馬車の馬

我が足は彼れ(神)の歩履に堅く隨へり、我は彼れ(神)の道を守りて離れざりき。
(約百記第廿三章)

我が此の皮此の身の朽ち果てん後、我れ肉を離れて神を見む。
(約百記第十九章)

汗水流し、沫噴きて、
打たるゝ鞭に、疲れたる

足を強いても運びつゝ、
力の限り駈り行く、
これ馬車馬の我身なり。

同じき馬にありながら、
口は美食に飽き足りつ、
背に白銀の鞍置きて、
榮華に誇る貴公子を、
優やかに乗せて行くもあり。
又我が如く、馬車を牽き、

休息まん暇もあらばこそ、
粗食にだにも飽かなくに、
生命を賭けて駈け走り、
勞働力役するもあり。

彼れは我身を嘲りて、
『實にも卑賤しき馬』と呼ぶ。
あゝ然れども、然れども、
彼れ王侯の馬は榮達か、
我れ馬車馬の身は屈辱か、

造主なる神ぞ知る。

我が兩眼に被革あり、
是れ邪曲を見ざれとて。
我が行く道に鐵線あり、
是れ迷ふこと無かれとて。

邪曲見ざる我が歩み、
神の導く歩にて、
迷ふことなき我が道は、

天に達する道なるぞ。

力の限り駈け行きて、
呼吸と血液の盡くる時
天の御國に到る也、
神の御傍に眠る也。
我が生こそは樂しけれ、
我が命こそは安けれな。

思へば世には馬多し、

其の馬多き馬の中、
馬車の馬たる我れこそは、
無限の祝福と榮光とを、
實に一身に荷ふなれ。

下界夢なほ覺めずして、
滿都肅たる未明に、
獨り厩を起き出でゝ
神に感謝を捧げんと、
鬣整へ首擧げて、

一聲天に嘶けば、
あゝ太空に風清く、
あゝ皇穹に星高し。

汝、馬に力を與へきや、
其頸に勇しき鬣を裝ひきや、
汝、之を蝗蟲の如く飛ばしむるや、
其の嘶く聲の響は畏るべし。

（約百記第三十九章）

感吟

風渡る、木の下蔭に、佇めば、
神のかなづる、琴の音ぞする。

草の葉に、結べる露の、玉の中に、
神は宿れり、心して見よ。

雲の色、霞の影や、虹の彩、
神の聖筆の畫こそ妙なれ。

天國

神の國は何れの時に來る乎。と、パリサイの人問ひければ、イエス答へて言ひけるは神の國は顯れて來る者に非ず、此處に見よ彼處に視よと人の言ふべき者に非ず、夫れ神の國は爾等の衷に在り。

（路加傳第十七章）

漏る雨露も繁げからむ、
軒は傾き、屋根朽ちて、

貧しく見ゆる家一軒。

然く貧しく見ゆれども、
家内には愛の風満ちて、
讃美の聲も洩るる也。

夕飯も今や終へぬらし、
父母娘うち集ひ、
椽側近く納涼せり。

清き笑ひの其中に、
娘の唱ふ歌聞けば、

『我が宿を、賤が伏屋と、人は言へど、
神住みませば、是れ天つ國。』

(人の心情と神の心情)

他人の悲を悲む情は
是れ猶ほ人の情也。
他人の喜を喜ぶ情は
是れ正に神の情也。
他人の惡を憎む心は
是れ猶ほ人の心也。
他人の善を好む心は
是れ正に神の心也。

農夫

爾、心を盡くし、精神を盡くし、力を盡くし、意を盡くして、主なる爾の神を愛すべし。

(申命記第六章)

日は今、山に沈みたり、
西のみ空にいと紅く
色づく雲の綾錦。
鳥も塒に歸るらし、
群を作りて五ツ六ツ。

遠きあなたの村に、はや
夕炊の煙り立ちのぼる。

近きこなたの田の面に、
立ち働ける年若き
夫婦の農夫、その面は
赤く黒めど、いと強き
其の筋骨に、勞働の
甲斐々々しさを示したり。

＊　＊　＊　＊　＊

靜けく暮るゝ夕空の
波を忽ちゆるがして、
響きわたるは、正に是れ
七時を告ぐる鐘の聲。

『今は時よ』と言ひ合ひつ、
二人は共に笠を脱ぎ。
鋤と鎌とを地に置きて、
相向ひつゝ首垂れて、
無聲の祈禱捧げける。

『天地治し召し給ふ
父なる愛の我が神よ、
我等二人は今こゝに、
爾の聖なる前に伏す。

我等拙き者なるに、
我等賤しき者なるに、
今日も朝より夕まで、
大能の御手垂れ給ひ、

一日の業を障りなく、
終へさせ給ふ有難さ、

我等の頭に、今日も亦
温き日の光りあり。
我等の肌に、今日も亦
涼しき風の香りあり。
我等の靈に今日も亦
活動の膏油豐かにて、
我等の腕は、今日も亦

奮闘の力に張緊まり、
我等の額は、今日も亦
歡喜の汗にぞ濡へる。

我等が耕し、種子播きて、
水灌ぎつゝ、耘りつゝ、
植ゑたる早苗、今はしも
日光と雨露の惠にて、
日毎日毎に生長てり。
やがて花咲き、實らなむ、

收穫すべき時は來む。
思へば嬉しゝ、嬉しゝ。
涙も恩に答へ難しや。

朝より夕に至るまで、
鍬と鎌とを手に執りて、
田の面に立ちて働けば、
畔の小花に靜思あり、
空の小鳥に讃歌あり。
今日も疲れを忘れけり。

今日も倦むことなかりけり。
我等の生の安き哉、
我等の業の樂しかも。

我等の肉は、いと低き
此地の泥に埋るれど、
我等の靈は、いと高き
爾を天に慕ふなり。
我等のたどる道程を
直く守らせ給へかし、

我等の爲すべき行を
潔く保たせ給へかし、
永遠爾を愛すべく、

日毎々々に注ぐなる
爾の大なる恩惠は、
我等二人の小さなる
身にも靈にも溢る也、
思へば感謝、あゝ感謝。
然あるからに、願くは、

いよいよ深き敬虔と
ますます低き謙遜を、
我等の心に賜へかし、
永遠爾を愛すべく、

靜けく暮るゝ此の夕、
天地の平和なる如く、
我等の心も平和也。
父なる神よ、願くは、
我等職分をなし終へて

此世を去らん臨終にも、
斯かる平和の恩寵をば、
我等二人の靈魂より
取り去り給ふこと勿れ。

今日の仕事も終へぬれば、
我等二人は、今將さに、
家路に向ひ去らんとす。
去りての後は田も稻も、
爾の大能の御手をもて、

安く守らせ給へかし、
復び見舞はむ明朝まで。

あゝ此感謝、此祈禱、
救主なるキリストの
聖名に依りてぞ奉る、
聽き上げ給へ、アーメン。」

心と心と相結び、
靈と靈とが相和して、

捧げまつれる此の祈禱、
永遠よりぞ永遠に、
エホバの胸に響くらむ
あはれ無聲の此の祈禱。

富者の財も學者の智も、
英雄の略も、帝王の威も、
抑も國家の衝突も、
將又人種の爭鬪も、
あゝ此の無聲の祈禱の前に、

果して何の意味かある。

＊　＊　＊　＊

反照既に薄らぎて、
蒼然たりや暮の色、
名殘の雲の彩消えて、
水色なせるみ空には、
はや明星の影見えて、
あはれ平和の田の面に、
靜けき夜の使者來ぬ。

『いざや』と起ちて、相共に、
鍬を取り上げ、鎌とりつ、
復び笠を戴きて、
二人は家に向ひけり。
やがて姿は立ちこむる
暮靄の裡に隱れ行く。

今夜も夢はいや聖く、
神の御國を繞るらむ。

睡香樹

我に牡丹の姿なく、
我に櫻の色もなし。
されども神は我が花に
一種の香をぞ與へける、
其香は何ぞ『愛の香』なりけり。
籬の端や、庭の前、
山路に野邊に咲き出でゝ、
傍近く來る人の
袖に我が香を移してむ、
袂に我が香を留めてむ。

白百合

汝、途の長きに疲れたれど、なほ望みなしと
言はず。汝、力をいきかへされしに依りて、疲
弱へざりき。

(以賽亞書第五十八章)

なやむ旅人途にあり。
背の重荷はいと重し。
晝の暑さは蒸す如し、
足は痛みて、血は出でぬ、

腹も空しく、食はなし、
咽喉渇きて堪へ難し、
息まん木蔭更になし、
村里遠し、人見えず、
あゝ如何にせむ、如何にせむ、
されど行くべき處まで、
行かずに我のあるべしや、
斯くと思ひて氣を勇め、
又も歩みをヨロ〳〵と、
運びし路の傍らに、

優しく笑みて咲き出でし
露白百合の花一枝、
慰藉の神は此處にあり。

我れは、我れに力を與ふるキリストに依りて、諸ての事を爲し得る也
（腓立比書第四章）

吟感
（讃美歌に依る）

愛はそれ、燃ゆる聖らの、火にあれば、
祈りは煙の昇るなりけり。

うれしやな、罪のもと網、たち切りて、
我が舟は行く、天つ港に。

死の川を、越えてこそ知れ、天つ神の、
愛の深さの、限りなきをば。

獨唱

憂ふるに似たれども常に喜び、貧しきに似たれども多くの人を富ましし、何も有たざるに似たれども、凡ての物を有てり。

（哥林多後書第六章）

我れに一卷の聖書あり。
我れに一冊の讃美歌あり。
我れに神に盡くす愛あり。

我れに人に濺ぐ涙あり。

身乏しけれど、靈の糧は信仰の倉に滿てり。
家貧しけれど、主に於ける兄弟姉妹に富めり。

我が胸は小さけれど、我が敵を容るゝに足る。
我が腕は弱けれど、惡魔の力に抗するに足る。

悲歎の中にも慰籍あり。
失望の中にも勇氣あり。

世は、時有つて、我を棄てむ。
我れは、永久に、世をば愛せむ。

山は紫にして、水は青し。
霜は清くして、星は高し。

花と月とは我が爲に笑めり。
風と鳥とは我が爲に歌へり。

我れの天地は和樂也。
我れの世界は希望也。

我れ祈禱して職務を執る。
我れ感謝して臥戸に入る。

樂しい哉、我が生。
大なる哉、神の愛。

鐵道工夫

我等彼れ(基督)より恩惠と使徒の職とを受く、之れ其名の爲に萬國の人をして信仰の道に從はせんと也。

(羅馬書第一章)

見よ、此工事今に成り、
此道今に通じなば、
火輪轟然煙を吐き、
百里や千里又萬里、

荷物走りて人飛びて、
世界は更に新なる
活動をこそ始むらめ。

我れは賤しき工夫にて、
有る甲斐もなき身なれども、
此の一本の鶴嘴と、
此の一本の腕とにて、
世界活動の大道を
開拓しつる者なりと、

思へば我が靈躍る也。
無限の慰籍心に湧き、
無量の奮勵體に溢る。

寒暑風雨も何のその、
いとしき妻が調理へる
辨當を腰に結びつけ、
生命と頼む一本の
鶴嘴肩に荷ひつゝ、
今日も線路に勇み行く。

眞の光眞の力

人の惡を見る眼によりも、
己れの罪を見る眼にぞ、
眞の光りは輝ける。

傲る强者の腕によりも、
遜だる弱者の腕にこそ、
眞の力はこもるなれ。

朝顔

我が心は麗しき事にて溢る。
（詩篇第四十五篇）

世人は然く言ふめれど、
妾れは不幸の花ならず、
妾れは短命の花ならず。

弱く小さき身なれども、
蕋に蕚に、英に、

賦與られたる妾が美をば、
凡て顕はし盡くしたり、

斯くして神の前に咲き、
斯くして神の前に散る。
咲くに榮光のあるものを、
散るに歡喜なからめや、

幸ある長き生命ぞと、
感謝してこそ凋み行くなれ。

蝴蝶

（約翰傳第十一章）

イエス彼に言ひけるは、我は復活なり生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生くべし、凡そ我を信ずる者は永遠も死ぬることなし。

若しキリスト爾曹に在らば體は罪に緣りて死に、靈魂は義に緣りて生きん、若しイエスを死より甦へらしゝ者の靈爾曹に住ま

ば、キリストを死より甦へらしゝ者は、其爾曹に住む所の靈をもて、爾曹が死ぬべき身體をも生かすべし。

（羅馬書第八章）

醜しと人に厭はれて、
死にきと世には思はれし
毛蟲の繭より復活へり、
神の氣息なる靜風に、
自然の色を彩どれる

衣の袖をふりはへて、
麗温の空に逍遙びては、
死の影、雲と消え行きて、
生命は長閑き夏の日や、
花に眞理の香を嗅ぎつ、
露には愛の味嘗めつ、
平和自由の天地を
我有顔に舞ひ遊ぶ、
あはれ、蝴蝶よ、汝はそも、
如何なる靈の化身にや、

菫

温柔き言は潔白し。
謙遜は尊貴に先だつ。

（箴言第十五章）

汝よ、小さき花菫、
汝が色こそは優しけれ、
汝が香こそゆかしけれ。
しかも、衒はず、慢らず、

其の謙遜の首垂れて、
神に祈れり、人知れず、
静けき森の下蔭に。

汝よ、わが友、花菫、
今年はこゝに凋落むとも、
愛と生命を根に受けて。
また來む春は萠え出でよ、
聖き祈りを續くべく。

平　等

王者の位、身に帶びて、
一大國を治むるも、
同じく世には盡くすなり。
屠屋の業をいとなみて、
汚れし物を集むるも、
同じく世には盡くすなり。
同じき人と生れ來て、
同じく世には盡くすもの、
絶對無限の神の前に、
貴賤上下のあるべしや。

二ツの水

然れど、終まで忍ぶ者は救はれむ。
（馬太傳第十章）

我れ新しき天と地とを見たり。……
神、彼等の目の涙を悉く拭ひとり、また死あらず、哀み哭き痛みあることなし、そは前事既に過去りたれば也。
（約翰默思錄第二十一章）

北の水

『我が名を苦しき汗とこそ
運命の神は名づけしか、
まこと苦しき汗なれや。

骨をも碎き肉を裂く
此世の辛さ身一ッに、
心を焦がし靈を燒く
此世の痛み身一ッに、
集りつどひつむまゝに、
我が露雫湧き出でゝ、

水と流れて此處に來ぬ。
暗き林の下蔭を
音も立てられで潜ぐりつゝ、
嶮しき岩の崖路を
からくも越えて過ぎ來つゝ、
天涯地角我が心情を
知る者なくて唯ひとり、
流れて此處に到りけり。』

南の水

『妾が名をつらき涙とぞ
攝理の神は名づけゝる、
まことにつらき涙なり。

腸斷れ胸裂くる
此世の惱み身一ッに、
血潮も涸れて息氣絶ゆる
此世の嘆き身一ッに、
繋りつどひ積むまゝに、

妾が露雫湧き出でゝ、
水と流れて此處に來ぬ。

憂の雲に蔽はれて
日影を仰ぐ暇を無み、
冷酷き風に暴されて
いつか温まん、あゝ此身、
天涯地角妾が境を
解する者なく唯ひとり、
流れて此處に到りけり。』

北の水

『苦しき汗は我にして、
つらき涙は君ならば、
君こそ我の知己にして
我が心情を知るならめ、
我れ嬉しさに咽ぶ也。』

南の水

『つらき涙は妾にして、

苦しき汗は君ならば、
君こそ妾の知己にして、
妾が境遇を解すらめ、
妾れ嬉しさに咽ぶ也。』

北の水

『あゝ然れども、然れども、
君見給へや、行先は、
悲惨の樹木生ひ茂げる
迫害の谷にあらざるか。

また見給へや、其上は
辛酸の岩角も鋭き
苦悩の山にあらざるか、
あゝ此谷を如何にせむ、
あゝ此山を如何にせむ。』

南の水

『實にこそ然なれ、さはあれど、
妾が境遇を解しつる
知己なる君と伴ならば、

迫害の谷も何のその、
苦悩の山も何のその、
妾は勇みて越え行かむ、
妾は躍りて過ぎ行かむ、
行きて行方の涯を見む。』

北の水

『誠に然り、我は聞く、
迫害の谷經廻りて、
苦悩の山を越え行けば、

其處に我等の世界あり、
「平和の海」は其れ也と。

思へや、君よ、其海を、
谷も隔てず、山もなく、
一碧萬里波清み、
鏡の如き大面に、
朝の使來つる時
麗温の日影輝きて、
夕べの使來つる時

高き星影映りつゝ、
天つ國より吹き來る
太初の清き靜風を
徐ろに受けて、永遠に
湛え〳〵てあゝ平和、
平和の滿つる斯の海ぞ、
やがて我等の住處なる、
實に永遠の住處なる。』

南の水

『あゝよし然らば、いざさらば、
同情の君ともろ共に、
知己なる君と双ともに、
流れて行かむ涯の涯。

此世を廻ぐる妾が流れ、
無限のなやみありとても、
無量のなげきありとても、
忍びつ、堪へつ、耐へつゝ、
流れて行かむ涯の涯、

涯の涯まで君と妾れ
流れて行かむ、永遠の
「平和の海」に入らむまで。』

＊　＊　＊

二ッの水の端なくも
同じき野邊に落合ひて、
あゝ勇ましく樂しげに、
一つの小河流れ行く也。

北斗星

我が靈魂は默して唯神を待つ、我が救は神より出づる也。

（詩篇第六十二篇）

涯しも知らぬ海原に、
浮くや木葉の如くにも、
見ゆる一ツの小舟あり。
忽ち颶風吹き來り、
逆卷く浪は山のごと、

寄せてかゝりて舟をおふ。
日は早や既に暮れ果てゝ、
東西南北見えわかず。
小舟に乘れる壯者は、
勢の限り航ぎ出しぬ。
覆へさじと努めしも、
今や力の盡きしかば、
凡てを棄てゝ、靜かにぞ、
祈りと共に身も舟も、
大能の手に任かせける。

あゝ不思議やな、嵐去り
浪静りて、雲晴れて、
輝き出づる北斗星、
指導く神は其處にあり。

我等四方より患難を受くれども窮せず、詮術盡くれども望を失はず、迫害らるれども棄てられず、跌倒るれども亡びず

（哥林多後書第四章）

蓮

視よ、我れ邪曲の中に生れ、罪にありて我母我れを孕みたりき。

（詩篇第五十一篇）

耶蘇基督の血凡て我等を罪より潔む。

（約翰第一書第一章）

根も潔からば枝も亦潔からむ。

（羅馬書第十一章）

草と生まれし我れ蓮。

泥の汚れに育ちたり。
されど愛なる我が神は、
妙なる聖手のわざをもて、
既に我が根を潔めたり、
我れの凡てを洗ひたり。

今は咲くなり、池の上、
花に蕚に葉に莖に、
朝夕結ぶ白露は
感謝に咽ぶ我が涙。

凱歌

然れど、懼るゝ勿れ、我れ既に世に勝てり。
(約翰傳第十六章)

凡そ神に由りて生るゝ者は世に勝つ、我等なして世に勝たしるむものは我等が信なり、誰か能く世に勝たんイエスを神の子と信ずる者に非ずや。
(約翰第一書第五章)

されど我儕を愛しめる者に賴り、凡て此等

の事に勝ち得て餘りある也。

（羅馬書第八章）

今日野にありて明日は爐に
投げ入れらるゝ花をしも、
自然の美にて裝はする
「愛なる神」の在す世に、
我に憂慮あるべしや。

猛ける嵐をいましめて、
か弱き梢に宿りせる

小鳥の巣をも落させぬ
「力の神」の在す世に、
我れに恐怖のあるべしや。

善人惡人の差なく、
義者不義者にも等しくぞ、
日をも雨をも賜ふなる
「完全の神」在す世に、
我に不平のあるべしや。

愛と力と完全の
神に此の身を任かせ來て、
憂慮、恐怖、不平なく、
此の世を渡るはいと易く、
貧しく、弱く、愚かなる
我も勝ち得て餘りある也。

車夫

我が惠み汝に足れり。

（哥林多後書第十二章）

塵の巷に住みて、塵を蒙りつゝ、
塵の世の人を乘せて、塵の中を走る。
雨の夜、風の日、炎熱の夏、瓦寒の冬、
終日車を引きて勞働す。

されど、是れ我が職分なり。

人世の爲に致す所以なり。
彼れ廟堂の大臣も是れ人世の爲に勞し、
我れ塵巷の車夫も亦人世の爲に勤む。

小さけれども、家あり、雨露を凌ぐべし。
老いぬれども、父母あり、健かにまします。
妻は我を愛し、子は我を慕ふ。
賃錢は少なけれど、一家の命を繋ぐに足る。

終日塵を呼吸すれど

勞働の度多きが故に、
身體に、健康の減ずる憂はなくして、
精神に、活氣の增す喜のみぞある。

誠に、一日の勞を終へて家に歸れば、
父母に歡喜あり、妻子に笑顏あり、
優しき愛に包まれて、樂しき膳に箸を執る。
我が食は甘く、我が眠は安し。

今更に何の願ふ所ぞ、

今更に何の羨む所ぞ。
一挺の車と、二本の腕と、
これあれば我が爲に萬事足る。

一世の智識を貯へ、巨萬の富を盡くして、
而も憂悶苦惱に死する人さへ多き世に、
智なく、錢なき我にして此の平和あらんとは、
あゝ、神の惠みは我に足れり、我に足れり。

花の死

我は、猶生ける生者よりも既に死にたる死者をもて幸なりとす。

（傳道之書第四章）

其の生命を得る者は之を失ひ、我が爲に生命を失ふ者は之を得べし。

（馬太傳第十章）

神の御爲に苦みつゝ、
神の御爲に咲くものを、

惡魔はびこる人の世の
迫害の鎌に、果敢なくも、
殘酷くも刈られしあゝ我が身、
頼む生命の根を絶えて、
小枝ながらに捨てられつ、
牛に踏まれつ、馬に蹴られ、
やがて暑き日蒸し來れば、
色もさめはて、香も消えつ、
さては焚火の材料にとて、
竈の中に投げられむ、

はた降り續く雨水に、
ぬれて腐れば、花瓣も
蕚も朽ちて、空しくも
塵と化らんか、あゝ我が身、
盡きぬ恨みを殘しつゝ、
絶えぬ嘆きを留めつゝ、
風とこしへに凄じく、
露とこしへに冷たしや。

＊　＊　＊　＊　＊

あゝ然れども、これ實にや、

愛なる神の御さだめぞ。
神の授けし此の生命、
賜ふも、奪るも、共に只
聖旨にのみぞ任かすべき。
深き攝理を解り來て、
思へば無量の平和あり。
よし、我が命に安んじて、
今は我が死を樂まむ。

然り、我れ今捨てられて、

枯れて死に行く其の時は、
これなほ世の花全盛の
榮華に生くる時なるぞ、
されど汝人思ひ見よ、
彼等の生と我れの死と、
孰れ眞正の幸福なりや、
あゝ、神のみぞ知り給ふ。

感吟

受けて酌む、神の杯酒の味、
甘き苦きも、嬉しかりけり。

我れは鐵、神は鍛工にて、ましませば、
鍛ふるまゝに、身をば任せむ。

身も靈も、捧げ奉りし、我なれば、
死るも生るも、神のまにまに。

蠶

我等のうち己れの爲に生き、己れの爲に死ぬる者なし、そは我等生くるも主の爲に生き、死ぬるも主の爲に死ぬ、是故に或は生き或は死ぬるも、我等は皆、主のものなり。

(羅馬書第十四章)

我れ卵にてありし時、
尊き人は、温かき
室に我をば孵化らしめ、

小さき此身をいたはりて、
桑の若葉を細かくも
きざみて、我に食ましめぬ。
寒暖計に寒暖の
度を見計らひ、晴雨計に
晴雨の如何を氣遣ひつ、
いと心して、あゝ我を
尊き人は育てたり。

初の程は、いとこまく
柔き葉を食ませしが、
我身漸く生ひ立てば、
大きく厚き葉を與ふ。
日毎日毎に桑の葉を、
食ひ食ひて盡くす也。
さは然りながら、さりながら、
二度、三度、四度眠て、
我身の成長極まれば、

今まで食みし其桑を、
絲にぞ變へて吐き出だす、
我が事茲に終るなり。

そも其絲は何なりや、
「清き生絲」と人は呼ぶ。
人、此絲を染めなして、
絹の衣服を織り出だし、
肌に適しと之を着る。

我は小さき虫なれど、
我はか弱き虫なれど、
我は醜き虫なれど、
尊き人の手に生れ、
尊き人に育てられ、
尊き人の爲に生き、
尊き人の爲に死ぬ。

人工と天然

飾れる庭に植ゑられて、
人間の手に育ちたる
唐紅の牧丹花に、
なに美しき色やある。
自然の谷に生へ出で、
神の惠みの雨露に
咲ける眞白の百合にこそ、
眞美の色は顯はるれ。

蛋が妻

賢き婦は其夫の冠辨なり。（箴言第十二章）

神の求め給ふ祭物は碎けたる靈魂なり。

（詩篇第五十一篇）

心の貧しき者は福なり、天國は其人の有なれば也

（馬太傳第五章）

『いとも賤しき者なるを、
いともか弱き者なるを、
天つ御神の限りなき
惠みの御手に育てられ、

キリスト、エスの量りなき
愛の血潮に救はれて、
今日まで斯くも平和なる
いとも樂しき生涯を、
送り來りし妾が身こそ、
世に比類なき祝福なれや。
思へば感謝胸に滿ち、
襤褸の袖の朝夕に、
涙の露に沾るゝかも。

あゝ主の爲に、世の爲に、
猶働かむとは思へども、
思へば今は時なるか、
神は妾をば召し給ふ。
あゝ、いざさらば、今茲に、
いと價なき此の軀、
死の御使に渡さなむ、
此世を今は見納めと、
貧しく乏しき生業は、

此世に遺さん形見とて、
唯一條の襷のみ。（勞働）

拙く愚かなる生涯は、
彼世に持行く貢とて、
碎けし靈一つのみ。（謙遜）

さのみ小さき祭物、
なほ之をしも我が神が
受納れ給はゝ、あはれ、妾が
現世の別れの杯に、
歡喜の酒は溢れなむ。

天國の旅に今向ふ。
其の行先の暗くとも、
其の道程の遠くとも
光と杖と賴むなる
主の導きと守りとは、
永遠妾に伴へば、
輝く望み胸に滿ち、
聖園の光景を夢みつゝ、
心靜かに歌ひてぞ、

聖父の御許に歸るなる。
實にや其處には、最愛の
失せし妾が兒も復活へり、
妾を待ちつゝあらむかも。

あはれ、臨終の妾が床に、
夫の君、嘆き給はざれ、
妾喜びて歸るなり。
君も此世の業を終へ、
他年召されて、天國の

家に歸らん其時は、
妾れ其門に迎へなむ。
あはれ其時いかばかり
嬉しき涙に咽ぶらむ。
我等再び彼の世にて、
相見む日まで君が身に、
あゝ君が身に、豊かなる
神の祝福あれよかし。
あゝいざさらば、アーメン。」

臨終の床に、妙なりや、
あゝ妙なりや、麗はしき
神の使の影見えて、
天つ光の輝けば、
床を守れる此の蜑夫の
悲しき涙はいつしかに、
感謝の祈りと變りきて、
讃美の歌を唱へつゝ、
妻の首途を送りけり。

* * * * *

靜けく暮るゝ此の磯邊、
あゝ穩かの海の面、
波を彩る雲の影、
夕日の色の麗はしく
西の岬に沈みつゝ、
星の光の三ツ二ツ
み空に見えて、あゝ平和、
天地平和に滿つる時、
嬉しき笑顔を留めつゝ
夫の讃美に送られて、

天に昇りし妻ありき。
あゝ此磯の夕ま暮、
あゝ此海の波と雲、
永遠こゝに此人の
臨終の狀を語るらし。

求安

凡て勞れたる者また重きを負へる者は我に來れ、我れ汝等を息ませむ、我は心柔和にして謙遜者なれば我れに學べ、汝等心に平安を獲べし。

（馬太傳第十二章）

夫れ十字架の敎は沈淪者には愚なるもの、我等救はるゝ者には神の大能たる也。

（哥林多前書第一章）

安きを得んと、或者は

『名譽』の都をさまよひぬ。

安きを得んと、或者は
『智識』の山にふみ入りぬ。

安きを得んと、或者は
『財貨』の淵をさぐりたり。

安きを得んと、或者は
『權勢』の野を巡ぐりたり。

『權勢』の野はいたづらに
寂寥しき風のすさぶのみ。

『財貨』の淵はいたづらに
慾の深みに沈むのみ。

『智識』の山はいたづらに
迷想の雲のかゝるのみ。

『名譽』の都はいたづらに
爭亂巷に滿つるのみ。

然れど是等を外にして
碎けし靈を唯一つ（悔改）
活ける御神に供ふべく、
「十字架の許に走せ行きて、
かたく縋りし其人ぞ、
大能の聖手に救はれて、
眞正に永遠の平安をば、

功行なしに得たりける。

然れと我には惟我等の主イエスキリストの十字架の外に誇る所なからんことを願ふ。
（加拉太書第六章）

義しき人は其信仰によりて生くべし
（哈巴谷書第二章）

感吟

憂き時も、悲しき時も、泣く時も、
我が隱家は、祈禱なりけり。

苦痛む時、懊惱む時、嘆息く時、
我が慰藉は、聖書なりけり。

名も智慧も、黃金も權勢も、何かせむ、
我れの聖寶は、活ける十字架、

葡萄

我れは葡萄の樹、爾曹は其の枝也、人若し我に居り、我れ亦彼れに居らば、多くの實を結ぶべし。

（約翰傳第十五章）

一本の根より養はれ、
一本の幹より支出でゝ、
無數に繁る我等枝、
高き、低きも、共にこれ

太き細きも、共にこれ
等しく兄弟姉妹なり。
西と東に異なれど、
北と南に向へども。

互に親しみ慰めつ、
互に助け勵ましつ、
辛苦き嵐を忍びつゝ、
冷酷き霜をも凌ぎつゝ、
根より幹より送らるゝ

愛の滋養に發育ちてぞ、
此世に發きし信仰の
美しき實を、天つ國
神の御園に結びてむ。

體は一つ、靈は一つなり、爾等の召されて有つ所の望の一つなるが如し。主一つ、信仰一つ、バプテスマ一つ、神即ち萬人の父一つ也。彼は萬人の上に在り、萬人に貫き、萬人の中に在り。

(以弗所書第四章)

蘭

人里遠き奥山の
谷の岩根に我れ生へぬ。
み雪も消えて、久方の
日影うらゝの春來なば、
我も苔みて花咲かむ、
咲きて香らむ、此の谷に。
訪ひ來る人のなしとても、
尋ぬる人のなしとても、
我は咲きつゝ香りつゝ
神の惠に答へなむ。

歸鳥

イエスキリスト我儕を釋きて自由を得させたり、是故に爾曹堅く立ちて再び奴隷の軛に繫がるゝこと勿れ。

（加拉太書第五章）

思へば我ぞ愚かなる。
『世上』の餌求めんと、
『現實』の籠に鎖されて、
『狹き天地』に昨日まで、

長き月日を送りにき。

籠の飾りは美しく、
甘き餌食も其中の
皿に豐けく盛りしかど、
あゝ『狹き世』を如何にせむ。
「奴隷」に等しき「束縛」に、
歌はん聲もいとしぶれ、
蹄かんとすれど舌鈍し、
臥さんとすれど處なく、

起たんとすれど甲斐もなし。
切に『永遠』『自由』なる
『理想』の鄕を戀ひ慕ひ
泣きて嘆きて悔いたりき。

一夜、不思議き神の手は、
我が籠の戸を開け給ふ、
我れ嬉しさに狂ひたり。
涙ながらに感謝して、
其のまゝ籠を出でにけり。

神誠めて告げけらく、
『現實の籠を速く出でゝ、
理想の郷に飛び歸れ』。
我れは夢なる心地して、
目に物見えず、一息に
飛びて歸りぬ、今日こゝに。

『理想』の郷の今更に
あゝ懷かしや、愛らしや。
あはれ其の山、其の川よ、

其の叢よ、其の森よ。
飛ぶも高しや大空に、
かけるも廣し野邊の原。
神の賜へる『天國』の
『靈』の餌を索めつゝ、
清らの川に、渴きたる
咽喉うちぬらし、嬉しくも
今日より歌ふ我が歌は。
神に捧くる感謝也。

鬼薊

是の故に人キリストに在るときは、新に造られたる者なり、舊きは去りて皆新しく作なるなり。

（哥林多後書第五章）

葉にも莖にも刺あれば、
他の草木に惡まれつ、
鬼の如しと呪はれて、
鬼薊てふ名は負へど、

是れも誠に神の手に、
造られたりし草ぞかし。

よし、其花は、醜けれど、
よし、葉に莖に刺あれど、
あゝ紅の露の玉、
いとも優しく、葉に莖に
花に蕚にかゝる時、
朝日の光輝きて、
夕日の色も照り添へば、

えならぬ姿に變りつゝ。
鬼の名負へる其花も、
百合の花より美しく、
菫の花より優しくぞ、
神の御前に現はれし。

四方の草木は驚きて、
露の榮を讃へけり。

暮の明星

夫れ人は既に草の如く、其榮は凡ての草の花の如し、草は枯れ、花は落つ、されど主の道は無窮に存する也。

（彼得前書第一章）

悲哀にかへて歡喜の膏を與へ、憂の心にかへて讃美の衣を與へしめ給ふ也。

（以賽亞書第六十一章

惱みの雲の晴れやらで、

嘆きの霧の消えやらで、
あゝ妾れ乙女唯一人、
人生の旅に行き暮れて
涙の谷にさまよひぬ、

實に底知れぬ谷なれや、
深き暗さの眼を鎖ぢて、
冷たきしめり身にしみて、
疲れ弱りて力なき
細けき脚のあゝいかで

這ひ出ん術も道もなく、
行くも歸るも谷まりて、
あゝ此の夕べ唯一人
思ひあまりて佇めば、
沈みに沈む妾が胸や、
消えに消え行く妾が心、

忽ちさし來る耀輝に、
驚きさめて見上ぐれば、
無限の闇を通し來て、

無邊の空の上高く、
優しく光る星一ツ、
靜かに妾れに語りける、

「あはれいとしき我が乙女、
我を無心と汝れ思ふか、
我を無情と汝れ思ふか、
汝が限りなき其の惱み
汝が量りなき其の嘆き
よし人間の世に誰一人

之を解せず、知らずとも、
あゝ我のみは酌み盡くす
無量の同情我れにあり。
見よや、汝の足もとを、
汝が踏み分けし草の上、
繁き清らの白露は、
我れの流しゝ涙なり。
汝の嘆きと惱とを
思ひやりての涙也。

あはれいとしき我が乙女、
汝の嘆きと惱みとは、
現世と人間に屬せずや
人は果敢なき人にして
世は消え失する世ならずや。
果敢なく消ゆる一時の
現世と人間にほだされて、
泣きて痛みて悲みて
汝が靈魂を殺すより、
いざ勇ましく眼を上げて

人間の上、世の上の
永遠の者を求めよや。

あはれいとしき我が乙女、
我を誰とか汝は見る。
世は消え人は失すとても、
宇宙と共に朽ちせざる
無窮の生命、永遠の
希望の光明、愛の神。』

* * * *

あゝ此の夕べ、端なくも
み空の星の影仰ぎ、
希望の光に照らされて、
新生命に妾れぞ入りぬる。

貧者の贈物

人、其の友の爲に己れの命を捐つ、此より大なる愛はなし　（約翰傳第十五章）

我れに一人の友はあり、
彼に何をば贈るべき。
或人は彼に、麗はしき
錦の衣を贈りたり。

或人は彼に、輝ける
玉の冠を贈りたり。

或人は彼に、曇りなき
智慧の鏡を贈りたり。

或人は彼に、力ある
勇氣の杖を贈りたり。

さは然りながら、我れはこれ、
あはれ眞の貧者にて、
錦の衣、玉冠、
智慧の鏡や、勇氣の杖、
一ッだに持てるものはなし。
彼に何をば贈るべき。

若し神旨に適ひなば、
緩急の際に此の『生命』
我れ我が友に捧げなむ。

吟感

登り來て、仰けば高し、神路山、
我が足はなほ、麓なりけり。

光明の、神にいよいよ、近づきて、
いよゝ我が影、暗黒くなる見ゆ。

いと強き、力の神に、たよりても、
弱き我れなほ、弱くありけり。

河と柳

我は高き所、聖き所に住み、亦心碎けて謙だる者と共に住み、謙る者の靈を活かし、碎けたる者の心を生かす。

（以賽亞書第五十七章）

父よ、然り、それ此の如きは聖旨に適へるなり。

（馬太傳第十一章）

岸の小柳

『大河の君よ、君と我れ
如何に久しき契りぞや。
さはれ我身は永遠に
此處に立てれど、君はそれ
晝夜を捨てず流れ行く。
君行く處いづこぞや、
親しき友よ、我が爲に
之を語りて告げねかし。』

大河の水

『君よ、見給へ、かの平野、
幾萬町の田に畑に、
四十日六十日の其間、
唯一滴の雨もなく、
はた一點の露もなく、
綠、波おる葉も莖も、
枯れて乾きて衰へて、
死なんばかりの稻麥を、
見るにも聞くにも忍びんや。
あはれ彼等の根の下に、

生命の水を注かんと、
我は彼處に流れ行く。

又見よ、彼處、町や村。
酷き主人に使はれて、
終日鞭たれ驅られつゝ、
重き荷物を背に負ひて、
此の暑き日に駈け出しつ、
力も汗も盡き果てゝ、
呼吸絶えんずる幾萬の

牛馬あるを我は知る。
あはれ彼等の胃の中に、
活氣の水を滿たさんと、
我れは彼處に流れ行く。

又見よ、彼處、大都會。
人は浮榮の香に醉ひて、
腐敗の夢を繰返し、
正義ひそみて聲はなく、
情慾ひとり横行し、

不義は人倫を覆へし、
富者は貧者を辱かしめ、
強者は弱者を虐げつ、
汚穢混濁漲ぎれる、
あゝ其の都會を聖むべく、
革新の波揚げんとて、
我は彼處に流れ行く

君は永遠此の岸に、
立ち茂れるは何故ぞ。』

岸の小柳

『惡に染みにし罪人が
其眞心に立ち歸り、
碎けし靈魂其まゝに、
懺悔の涙もせきあへず、
救と潔め乞ひ願ふ
思ひ切なる胸の中、
懊と耻に堪へ兼ねて、
人目を避けて夜の間に、

神に祈りを捧げんと、
我が枝蔭に泣き伏せり、
あはれ可憐しき其人を、
我が柔かき枝の手に、
撫で安んぜん爲にとて、
我は此處にぞ立茂げる、
永遠此處にぞ立茂げる。』

無名の花

神は智者を愧かしめんとて世の愚なる者を選び、强者を愧かしめんとて世の弱者を選び給ふ、また神は有者を滅さんとて世の賤者、貌視めらるゝ者即無きが如き者を選び給へり、これ凡ての人、神の前に誇ることなからん爲也。

（哥林多前書第一章）

幾億萬里の天上に、

輝きわたる辰星も、
等しく宇宙を裝ふなり。
千尋の海の底深く
沈める石の一つぶも、
等しく宇宙を裝ふなり。
至公至愛の神の眼に、
豈に高低の差あらんや。

千里の雲を衝いて立つ
巍乎崢嶸の山脈も、

等しく天地を飾るなり。
路のほとりの草の葉に
結べる露の雫さへ、
等しく天地を飾るなり。
至公至愛の神の眼に、
など大小の別あらん。

我れは無名の花なれば、
色も香もなく、小さくて、
世にも知られぬ者なれや。

あゝ然れども、然れども、
至公の神に造られて、
至愛の神に惠まれつ、
有てる凡てを發揮して、
天性のまゝに咲き出でつ、
無限無邊の宇宙をば
崇高偉大の天地をば
裝ひ飾りて、我も亦、
壯嚴美妙の『自然』には
貢献しつる者なるぞ。

大小高低の差別なき
至公至愛の神の眼に
名有ると無きと何なりや、
顯著る色香のなしとても、
賞讃る世人のなしとても、
天地宇宙をしろしめす
至愛の神に喜ばれ、
至公の神に納れられて、
あゝ數ならぬ此身しも、

かの『永遠の聖園』に、
植ゑ移さるゝことを得ば、
我れは不朽の花たらむ、
我れは不滅の花たらむ。

處世の歌

喜び樂め天に於て爾等の報賞多ければなり。

（馬太傳第五章）

我れ既に善き戰をたゝかひ、既に馳るべき途程を盡くし、既に信仰の道を守れり、今より後、義の冠我が爲に備へあり、主即ち正しき審判をなす者その日に至りて之を我に與ふ可し。

（提摩太後書第四章）

力の限りを盡くして働けども、
汗の限りを盡くして稼げども、
糧は乏しくして饑を滿たさず。
衣は薄くして寒さに堪へず。
あゝ現世の辛さ、いかで支ふべき。

然れども、我は慈愛の神を信じて、
不朽の生命を永遠の天國に求むる者、
不如意極りなき現世の困難も、
我れに於ては惠恩の賜物たらざるを得ず。

王者と爲つて天下の富を一身に荷ふよりも
裕か也。

敵は外より襲ひて我れを攻め、
仇は内に現れて我に裏切る。
我が肉は迫害の劍に斬られ、
我が骨は讒謗の槍もて刺さる。
あゝ現世のつらさ、いかで堪ふ可き。

然れども、我は正義の神を信じて、

最後の審判を永遠の天國に待つ者、
悲慘極りなき現世の苦痛も、
我に取りては慰藉の歡聲たるに外ならず。
百花の香を吸ひて群鳥の歌を耳にするより
も樂し。

理想は現實と違ひ、
理論は實際と反く。
善と惡とは其位を轉じ、
禍と福とは其所を倒まにせり。

あゝ現世の定めなき、いかで安んぜむ。

然れども、我は完全の神を信じて、
榮光の聖冠を永遠の天國に望む者、
危險極りなき現世の矛盾も、
我が爲には勝利の機近きを示す也。
順風に帆を揚げて平和の海を行くよりも安
し。

然り、慈愛正義完全の神を信じて、始めて

現世に無限の深意あり、無量の香味あり。
我が腕は奮勵の力に緊り、
我が胸は希望の光に輝き、
我が眼は感謝の涙に沾ふ。

唯知る、神を畏れ人を愛して、
樂んで日毎の天職を忠實に勤むべきを。
而して死の使の來らん其時、
小さき骸を此の土に殘し、
嬉しき笑顔を此の世に留めて、

あゝ我が靈魂、勇み去つてかの永遠の天國に
向はんを

エホバは我が牧者なり、我れ乏しき事あらじ。エホバは我を綠の野に臥させ、安息の水濱に伴ひ給ふ。エホバは我が靈魂を活かし、聖名の故をもて我を正しき道に導き給ふ。假令我れ死の蔭の谷を歩むとも禍害を懼れじ、爾我と偕に在せば也。爾の笞、爾の杖、我を慰む。爾我が仇の前に、我が爲に筵を設け、我が首に香油を灑ぎ給ふ、我が酒杯は溢る

也。我が世に在らむ限りは、必ず恩惠と憐憫と我に伴ひ來らむ。我は永遠にエホバの宮殿に住まむ。

（詩篇第二十三篇）

詩とは何ぞや

現時の詩たる、其の措辭と構想とに於て妙を極め、其の文字と詞句とに於て麗を盡くせり。而も其の傳ふる所は皮相賤劣なる戀愛にあらざれば、淺薄懦弱なる悲哀、現實の境遇に勝ち得ざる怠惰の不平にあらざれば、人生を空視する厭世の迷想なり。之を讀んで得る所は墮落と絶望とのみ。これ豈に詩の意義ならんや。詩とは美文麗句の製造にも非ず、また措辭構想の細工にも非ずして、誠に神聖高尚なる人生觀を供

給する健全なる文字を意味す。神と人と自然とに關する說敎即ち是れ也。故に詩人の天職は正に宗敎家の其れと等し。苟くも人生に對して光明と希望と奮勵と慰籍とを供せざるものは斷じて詩に非ざるなり。眞詩は眞信仰を待つて始めて來る。眞詩の背後には、必ずや、眞人格は潛伏めり、眞詩に生命の宿れるは是れが爲なり。余の詩を解すること斯の如し。余や薄信弱行、豈敢て自ら任じて宗敎家と言はんや、亦豈敢て自ら僭して詩人と稱せんや。

明治三十七年十二月九日印刷
明治三十七年十二月十三日發行　定價金拾八錢
明治三十八年五月八日再版發行

著者　葛卷星淵
發行者　東京神田區猿樂町二十五番地　若林鑒太郎
印刷者　東京京橋區日吉町十番地　中村彌助
發行所　東京市神田區猿樂町二十五番地　中庸堂書店

不許複製

中庸堂書店書目

米國加州沿岸日本人長老教會傳道監督イー、エー、ヌトーヂ博士序
日本稻澤謙一君　平塚勇之助君譯述

四福音書研究

定價三十錢　郵稅不要

加藤直士君譯

英語對譯　ロバルドソンの美訓

定價二十錢　郵稅二錢

松永文雄君編

片岡健吉君傳

米國トーレー博士原著
日本新井正平君譯

定價二十五錢　郵稅四錢

聖書研究ノ栞

定價十五錢　郵稅二錢

東京　中庸堂書店